みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Pork Consumption among Israeli Arab Citizens in the Galilee Region : Interactive Influences among the Christians, Muslims and the Jews

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-06-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 菅瀬, 晶子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006075

国立民族学博物館研究報告40(4): 619-652 (2016)

研究ノート

イスラエル・ガリラヤ地方のアラブ人市民にみられる豚肉食の現在

――キリスト教徒とムスリム，ユダヤ教徒の相互的影響――

菅　瀬　晶　子*

Pork Consumption among Israeli Arab Citizens in the Galilee Region: Interactive Influences among the Christians, Muslims and the Jews

Akiko Sugase

歴史的にパレスチナと呼ばれてきた地域に建国されたユダヤ人国家イスラエルには，2割程度のアラブ人市民が居住し，そのうち約8%をキリスト教徒が占めている。ユダヤ教徒やムスリムとは異なり，食の禁忌を持たない彼らは豚肉を食し，この地における豚肉生産・消費・流通をほぼ独占している。そのいっぽうで，豚肉食に嫌悪感を示すキリスト教徒もすくなくはない。聞き取り調査の内容からは，彼らの豚肉食嫌悪は比較的最近生じた傾向であることがわかる。そこにはムスリムやユダヤ教徒の価値観の影響もみられるが，もっとも大きな影響をおよぼしたのはイスラエルによるアラブ人市民に対する政策である。本来豚肉食は，キリスト教徒の主たる生業である農業と密接にかかわっていたが，軍政による農業の衰退や，豚肉食と密接にかかわっていた野豚猟の事実上の非合法化により，キリスト教徒の豚肉食観は大きく変化した。宗教的アイデンティティの根幹に深いかかわりを持っていた豚肉食への嫌悪感の増大は，キリスト教徒としての宗教的アイデンティティの損失をあらわしているといえる。

Israel, established in the historical region of Palestine as a “Jewish state” based on Zionism, also includes Arab citizens, who account for around 20% of the total population, and of which 8% are Christian.

*国立民族学博物館研究戦略センター

Key Words：Israel, Christians, Muslims, Jews, pork consumption

キーワード：イスラエル，キリスト教徒，ムスリム，ユダヤ教徒，豚肉食

Unlike Muslims and Jews, who are strictly prohibited from eating pork, the Christians enjoy eating pork, and so almost wholly monopolize the pork production, distribution and consumption in the country. Meanwhile, many Christians hesitate to eat pork today, a tendency that has emerged in the past few decades. It is true that they are influenced by the strict taboos of their neighbor Muslims and Jews, but the biggest reason is the Israeli system of ruling the Arab citizens. Namely, agriculture declined severely, which had formerly been the dominant vocation of the Arab Christians, because of the military rule in the Galilee region from 1948 to 1966. Wild pig hunting was also practically prohibited.

Those policies changed the Arab Christians' idea of pork consumption that had been deeply connected to their agricultural life, and which had formed the basis of their religious identity. The increase in pork aversion among the Arab Christians in Israel shows the damage inflicted on their religious identity.

1　はじめに

1.1　本稿の目的

1.2　アブラハム一神教における豚肉食の宗教的規制と先行研究

1.3　現在の東地中海地域アラビア語圏における豚肉食文化

2　イスラエル・ガリラヤ地方における豚肉の生産と消費

2.1　ガリラヤ地方のアラブ人キリスト教徒を中心とした豚肉生産・消費

2.1.1　イスラエルにおける養豚・豚肉産業の歴史

2.1.2　アラブ人キリスト教徒を中心とした豚肉生産・消費

2.2　豚肉を扱い，食すことに対する意識：アラブ人キリスト教徒の場合

2.2.1　豚を決して食べない人びと

2.2.2　豚を食べたことはあるが，常食しない人びと

2.2.3　好んで豚を食べる人びと

2.3　豚肉を扱い，食すことに対する意識：ムスリムの場合

2.3.1　豚肉を常食するムスリムの事例

2.3.2　ムスリムが豚肉を食べる理由

2.4　豚肉食とロシア系移民

2.5　狩猟と農業の衰退が豚肉食に与えた影響

3　結論：キリスト教徒のアイデンティティと豚肉食，歴史的パレスチナにおける豚肉食の今後

1　はじめに

1.1　本稿の目的

本稿は，宗教的マイノリティの食文化研究という切り口から，イスラエル・ガリラヤ地方のアラブ人キリスト教徒の食文化と宗教的アイデンティティの関係を探るとともに，他者であるムスリムやユダヤ教徒との間にみられる相互的な影響について論じることを目的としている。

イスラエルは歴史的にパレスチナと呼ばれてきた土地に，1948 年に建国されたユダヤ人国家であるが，人口の約 2 割をアラブ人が占めている。宗教的にはスンナ派イスラームと複数教派のキリスト教，さらにはシーア派イスラームから派生したドルーズの信徒であるが，本稿では未調査のドルーズについては扱わない。アラブ人市民の約 8 割強をムスリムが占め，約 8％をキリスト教徒が占めている。彼らアラブ人市民は，イスラエル北部のガリラヤ地方の農村部におもに居住しているが，建国以来農村から都市部へ出稼ぎ者を多く送り出しており，ハイファを中心とした都市にも大きなコミュニティが存在する。そのような都市では，ユダヤ人市民（ユダヤ教徒）とも混住している。本稿で中心的な事例となるキリスト教徒は，イスラエルにおいては二重の宗教的マイノリティである。

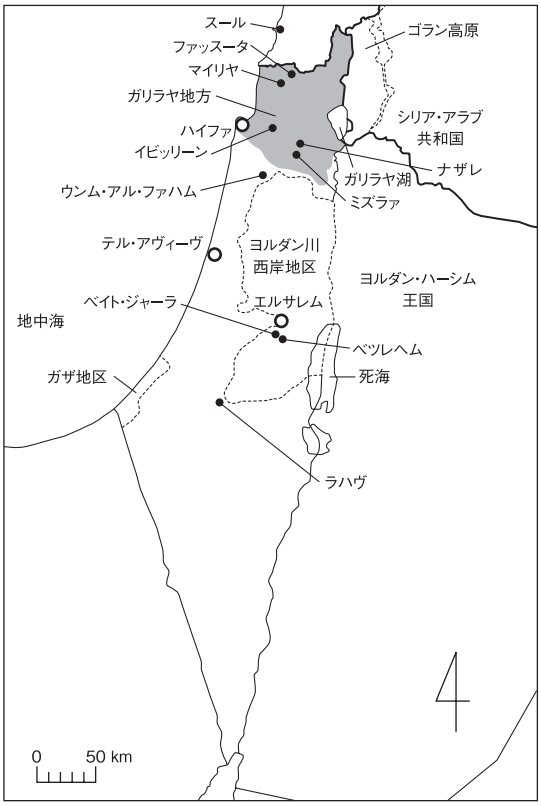
本稿が掲げる目的は，二点である。まず一点めは，豚肉食とキリスト教徒の宗教的なアイデンティティのかかわり，つまり豚肉食がキリスト教徒にとって複合的にいかなる意味を持つ行為であるのか，あきらかにすることである。7 世紀以来，イスラームが支配的な中東で，ムスリムとキリスト教徒にそれほど大きな文化的差異が存在する訳ではない。キリスト教徒の一部はアラム語など，特殊な言語を使用することもあるが，日常語はムスリムと同じアラビア語の方言であり，住居にも衣服にも大きな差異は認められない。唯一大きな差異がみられるのは食文化であり，その差異はキリスト教徒のみがおこなう，菜食と豚肉食に集約される。

しかしながら，宗教的アイデンティティとのかかわりという点において，菜食と豚肉食は大きく異なる位置づけにある。菜食は教会が推奨する宗教実践の一部であり，それを決められた日，あるいは一定期間におこなうことは，キリスト教徒としての宗教的アイデンティティの可視的な表象である。いっぽう，豚を食べることは直接的な宗教実践ではない。後述するように，キリスト教にはユダヤ教やイスラームのような

食規定が存在せず，それがむしろ信徒獲得に直結するキリスト教草創期の特徴であったために，豚を食べるという選択肢がキリスト教徒の食文化にのみ残っている。菜食は教会が定めた時期が来れば自動的に多くのキリスト教徒がおこなうが，豚肉食をおこなうか否かは個人の裁量に任されているのである。また，これは次項で整理する先行研究で言及されているが，豚は定住生活と密接にかかわっており，遊牧生活に根ざした宗教として成立したユダヤ教とイスラームで豚が忌避された理由のひとつとされている。歴史的パレスチナのキリスト教徒は，元来山間部で農業を生業としてきた人びとであり，今でも農耕とキリスト教の暦が連動しているため，農民出自であることとキリスト教徒としての宗教的アイデンティティは密接にかかわっている。長きに渡るオスマン帝国による支配や，その後のイスラエルによる占領を経て，歴史的パレスチナにおけるキリスト教徒のアイデンティティは，複合的かつ重層的なものとなっている（菅瀬 2009）。つまり，礼拝に参加したり菜食をおこなったりといった，表層的で可視的な宗教的アイデンティティの底には，アラビア語を母語とするアラブ人であること，土地に根ざす農民出自であることという，政治的な意味合いを強く持った深層の宗教的アイデンティティが存在する。豚肉食という行為は，キリスト教の教義とはさほど強いかかわりを持ってはいないが，農民としての彼らの生活に根ざす，深層の宗教的アイデンティティに深く関わっているのではなかろうか。

ユダヤ教とイスラームが支配的な歴史的パレスチナで，豚肉食をおこなうことはリスクをともなう。ならばなぜ，彼らはそれを実践するのか。キリスト教徒としての生活のなかで，豚肉食をどのように位置づけているのか。さらに，後述するようにごく一部ではあるが，ムスリムの中にも豚肉食を受容する者が出はじめているという現象に，彼らがいかにかかわっているのか。このような疑問を，宗教的な観点に限らず，政治的な側面からも複合的に考察してゆく。

本稿のもう一つの目的は，彼らキリスト教徒と隣り合って住む宗教的マジョリティ，すなわちムスリムやユダヤ教徒と相互に与えあう影響をあきらかにすることである。かつては同じ歴史的パレスチナに属し，キリスト教徒人口も比較的多いヨルダン川西岸地区では，豚肉食も豚肉産業も，担い手は圧倒的にキリスト教徒であり，ムスリムの間での豚禁忌は非常に根強い。現在キリスト教徒と混住するムスリムのなかに，きわめて少数ながら，豚肉を食べる者もあらわれはじめているが，豚禁忌の根強さゆえに，彼らへの聞き取り調査はほぼ不可能である。豚とひとこと発しただけで，インタビューを拒絶されることもめずらしくはなく，むしろこれが中東・イスラーム世界における，豚に対する標準的な認識である。しかしながら聞き取り調査の結果，



地図 1　歴史的パレスチナ（イスラエルおよびヨルダン川西岸地区，ガザ地区）とその周辺の地図

イスラエル側のガリラヤ地方では，キリスト教徒とムスリムそれぞれの豚に対する意識に，互いの価値観が影響を与えていることが確認できた。また，彼らアラブ人市民にとっては支配者であり，決して好意的な感情を抱いていないユダヤ人市民のユダヤ教的価値観もまた，豚肉を食べるキリスト教徒の存在ゆえに変化している。政治的に対立関係にあっても，文化的側面では混じりあう現象を，豚肉食を通じてみることが，もうひとつの目的である。

1.2　アブラハム一神教における豚肉食の宗教的規制と先行研究

源を同じくする一神教，ユダヤ教，キリスト教，イスラームを総称してアブラハム一神教と呼ぶが，これらのうちユダヤ教とイスラームにはそれぞれカシュルート（kashrūt, כשרות），ハラール（ḥalāl, حلال）／ハラーム（ḥarām, حرام）という，厳格な食

規定が存在する。カシュルートとは「コシェル（kosher, כשר）な状態」をさし，コシェルとは宗教的な食規定に適合する，食べてよい「清いもの」を意味する。ハラールもコシェルと同様，イスラームの食規定に適合する「許されたもの」を意味し，逆にハラームは不浄な「禁じられたもの」をあらわす。特徴的であるのは，これら二者でいずれも豚肉が宗教的に穢れているとみなされていることだ。ところが後述するように，キリスト教では豚肉の禁忌は宗教的な定義としては，いっさいみられない。

豚肉がユダヤ教とイスラームにおいて，なぜ不浄とみなされ，忌避されてきたのかについては，象徴人類学の分野ではユージーン・ハンによるレビ記の分析で扱われている。レビ記 11 章には，地上のあらゆる動物について，ユダヤ教徒が食べてよいものと食べてはいけないとされるもの，つまり宗教的に穢れているとされるものの分類が述べられているが，食べてよいものの条件とは「ひづめが分かれ，完全に割れており，しかも反すうするもの」である（レビ記 11 章 3 節）。その条件を満たさないものの事例として，「反すうするが，ひづめが分かれていない」ものと，「ひづめは分かれているが，反すうしない」ものが挙げられているが，前者にはらくだなど複数の動物が分類されているものの，後者は豚にしかあてはまらない。すなわち，豚のみが変則的なかたちで食べてよいものの分類からはじかれていると，ハンは述べる（Hann 1979: 108–109）。

豚の忌避について，メアリ・ダグラスはレビ記を扱った『汚穢と禁忌』第 3 章において，ユダヤ教における食の聖潔は完全性，つまり各々の属する集団と一体化していることの具体例になっていると述べる。ユダヤ教徒（古代イスラエル人）が食用としてきた家畜は，人間の社会的秩序の中に入って祝福を得ている存在であるがゆえに，清浄なものとみなされる。いっぽう，野獣は社会的秩序の外にあるがために，不浄とみなされると彼女は述べる。また，ユダヤ教徒はある種の牧畜民同様，野獣を食べる習慣がなかったため，ひづめがわかれた動物は食用に適していたが，豚はそのカテゴリーに含めることができなかったとも述べている。家畜と異なり，豚は皮革も毛も利用できず，肉しか活用できない。その例外性ゆえに，豚を食べることは禁忌とされたというのである（ダグラス 2009: 140–143）。

ダグラスのこのような豚の忌避の説明づけに，マーヴィン・ハリスは『食と文化の謎』で反論している。彼はレビ記の浄不浄の分類が，なぜそのようなものになったのかに注目すべきであるとし，牛や羊，山羊といった反すう動物がユダヤ教において浄とされる理由を分析する。彼によれば，これらの動物は高セルロース植物を主食とするので人間と食物をめぐって競合しないうえ，農業の生産性を高める利点がある。

いっぽう，豚は高セルロース植物を消化できない雑食動物であり，中東の気候と生態環境にあっていないため，飼育にコストがかかる。その高いリスクをしのぐ利点が豚には肉しかなく，ユダヤ教徒が住んでいた地域の環境条件が豚に適合しない以上，その飼育を正当化する必要がなかったため，不浄とされたというのがハリスの推察である。つまり，豚の忌避は「日常的な環境条件に対する一つの反応」にすぎないということである（ハリス 2001: 90–95, 107）。また，同様にカールトン・クーンは，オリーブとブドウの栽培が豚の飼育を妨げたのではないかと述べている。豚の飼育には餌のドングリがなるカシとブナの森が必要であるが，オリーブとブドウの栽培のために伐採されたため，豚の居場所がなくなったというのである（Coon 1958）。

古代パレスチナにおける豚飼育の傾向を，豚の骨の出土傾向から分析した考古学者ブライアン・ヘッセは，豚の忌避には大別すると二つの要因があるとしている。一つはイデオロギーやエスニック・アイデンティティに根ざす文化的・歴史的な要因であり，ダグラスがおこなった象徴的・言語学的な説明づけは，こちらに焦点を絞っている。もう一つは農業の様態や自然環境による文化的・環境的な要因であり，ハリスやクーンが重視した中東の環境と，そこに住む人びとの衛生観に主眼を置いた説明づけは，こちらに属する。また，文化的･歴史的要因として，ヘッセは豚の忌避に今となっては論証できない宗教的な強制力が働いていたのではというド・ヴォーの議論（de Vaux 1972: 267）を引用し，青銅器時代の間にすでに豚を忌避する宗教儀礼が存在したことで裏付けが取れるとしている（Hesse 1990: 197）。ユダヤ・イスラーム圏における豚の忌避が，象徴的・言語学的背景と，宗教と政治のかかわりを含めた文化的・歴史的背景の双方が複雑に絡み合い, 成立したものであるということは確かであろう。

ヘッセは「イデオロギーやエスニック・アイデンティティに根ざす文化的・歴史的な要因」と,「農業の様態や自然環境による環境的な要因」を当初分けて扱っているが，実際に彼やハリスの分析を読み込んでみれば，両者は複雑に絡みあい，不可分の関係にあることは明白である。そこで本稿でも，前者の文化的・歴史的要因により焦点を合わせながらも，環境的な要因の影響も重視する。1948 年のイスラエル建国とその後の対アラブ人市民政策という，政治的要因もかかわってくるであろう。

さて，本稿は豚肉食とキリスト教徒の宗教的アイデンティティの関係性を探るものであるため，アイデンティティをめぐる議論についても触れておきたい。特定の集団に共通したアイデンティティが存在することを前提とした議論は，カテゴリー化やアイデンティティの政治利用がことに危険視され，批判を浴びてきた（ホール 2000; 太田 2009; 2012）。確かにアイデンティティの概念は近代の発明であり，他者との比較

において発生するものである。しかしながら，イスラエルを含めて歴史的パレスチナおよび中東世界において，特定の宗教への帰属意識，すなわち宗教的アイデンティティは所与のものとみなされ，しかもこの地域でもっとも根本的，かつ最大の権力であり続けている父系親族集団と不可分の関係にある。宗教的アイデンティティは父系親族集団や教会などの権力によって強要されるものではなく，個々人は誕生と同時にそこに自動的に帰属し，なおかつ彼ら自身はそのことに疑いを持たず，帰属する宗教をみずからの誇りの源としているのである。また，イスラエルに抑圧される歴史的パレスチナのアラブ人にとって，ムスリムやキリスト教徒としての宗教的アイデンティティは，パレスチナ・アラブ人としてのエスニック・アイデンティティと同義でもある。宗教的アイデンティティはエスニック・アイデンティティでもあり，さらに占領政策への抵抗という文脈で正当化されている。

このように，歴史的パレスチナの宗教的アイデンティティは特殊な性格を帯びてはいるが, キリスト教徒にとってその表象の一部である豚肉食に対する見解には, 長年の隣人であるムスリムや, 1948 年以降の支配者となったイスラエルのシオニズム的政策が影響をおよぼしてきた。さらには宗教的規範に縛られない世俗派やロシア系など, 豚肉を食べるユダヤ人市民や, 欧米の食文化からも絶えず影響を受けているのである。

1.3　現在の東地中海地域アラビア語圏における豚肉食文化

本稿が扱っているイスラーム世界の中心である中東の一部であり，住民の圧倒的多数をムスリムが占める東地中海地域アラビア語圏の食文化において，肉は重要な意味と役割を担っている。ラマダーンの食事に肉料理は不可欠であり，犠牲祭においても各家庭で必ず羊か牛を屠り，同じムスリムの貧者に肉を分配することが，ムスリムとしての美徳であるとされている。また，願掛けや満願成就に際しての動物供犠もしばしばおこなわれており，そのとき供犠されるのはおもに羊，次いで牛である。イスラームにおいても聖典とされるユダヤの律法（旧約聖書）のなかに，神に対する最上級の感謝の意をあらわすため，子羊が供犠され，燔祭されるエピソードは多くみられる。イスラームにおいて肉，それも羊の肉を尊ぶ傾向は，先行するアブラハム一神教であるユダヤ教から受け継がれたものであり，イスラームのハラール／ハラーム概念そのものが，ユダヤの食規定（コシェル，カシュルート）の影響を色濃く受けている。

この地域において食されている肉の種類は，羊と牛，鶏が一般的であり，ガリラヤ地方北部など山間部の一部地域では山羊も好まれている。また，アラビア語で肉（laḥam, لحم）とは，通常四足動物の肉をさし，鶏（dajāj, دجاج）はそれよりも劣るもの

とみなされている。従って，来客をもてなす際に用いられるのももっぱら羊であり，鶏肉料理を出すことは失礼にあたる[1)]。四足動物の家畜ではあっても，食用に用いられないのが馬，それに豚であり，ことに豚はムスリムにとって，穢れた忌むべき存在である。豚を宗教的に不浄なものとし，その肉を食することを禁じる記述は，クルアーンの 2 章 173 節，5 章 3 節，6 章 145 節，16 章 115 節にみられる。羊を尊ぶ傾向と同様，これもまた，先行するアブラハム一神教であるユダヤ教の，豚肉食の禁忌に影響を受けたものとされる。ユダヤ教徒の聖典である律法の申命記 14 章 7 節に，「反すうするだけか，あるいは，ひづめが分かれただけの動物は食べてはならない」という記述があり，その代表例としてイノシシが挙げられている。イノシシが家畜化され，豚となったのちも，その肉を食べることの禁忌性は受け継がれた。ただし，新約聖書にはイエスがガリラヤ湖畔で豚に悪霊を乗り移らせ，退治する物語が登場し[2)]，紀元 1 世紀の前半には，ユダヤ教世界であるはずの歴史的パレスチナで豚が家畜化されていたことがわかる。周縁であるガリラヤ地方は，ユダヤ教とパレスチナ古来の豊穣神バァルを中心とする多神教がせめぎあう土地であったため，ユダヤ教の規範は必ずしも守られていなかった。また，ガリラヤ地方は 2.5 で後述するように，ブナ科の森林地帯が多く，豚のえさとなるドングリが豊富に採れる。豚が飼われていたのは，このような事情によるものであると考えられる。

ところが同じアブラハム一神教でありながら，キリスト教のみは豚肉食の禁忌をはじめとする，ユダヤ教の食規定を受け継がなかった。これはキリスト初期教会の成立と布教の経緯と大きなかかわりがある。イエスの死後（あるいは昇天後），彼の思想の共鳴者たちは大きく分けて 2 つの集団に分かれた。イエスの弟ヤコブを中心に，ユダヤ教徒コミュニティ内での布教に重きを置いたエルサレム教会と，イエスの死後彼の思想に共鳴したパウロらを中心とし，ローマ帝国の支配領域内における非ユダヤ教徒への布教をめざしたアンティオキア教会である。結果的に，キリスト教会の中心となったのは後者であり，ローマ帝国領内にキリスト教がひろく伝播した。旧約部分とは異なり，新約聖書には食規定にかんする記述は見当たらない。むしろ，食の浄不浄を問うべきではないと説く一節があるほどであり[3)]，キリスト初期教会は食規定をもうけなかったとみなしてよいだろう。豚肉食の禁忌のみならず，ユダヤ教では厳格であった食規定をあえてもうけないことで，より多くの信徒の獲得をはかったことが，その要因と考えられる。

このため，中東において豚肉の生産・消費にかかわるのは，ほぼキリスト教徒に限られてきた。ただし，豚を不浄視するイスラーム世界で豚を飼育することは常にリス

クを伴い，ともすればキリスト教徒が排斥される原因となりかねない。キリスト教徒による豚肉生産・消費は，常にムスリムの視線を意識しながら続けられてきた。エジプトでは，ザッバーリーン（al-Zabbālīn, الزبالين）と呼ばれる清掃業に就く貧困層のコプト教徒が豚を飼育してきたが，豚インフルエンザの世界的流行がみられた 2009 年，ザッバーリーンが自主的に豚を処分してしまうという事件が起きた。これは感染を未然に防ぐことが目的ではあったが，ムスリムからの風評被害を恐れ，先手を打ったというのが真相である。

歴史的パレスチナにおける豚肉生産・流通・消費の現場でも，ムスリムの視線は常に意識されている。以下からは，ヨルダン川西岸地区とガリラヤ地方における具体例を紹介してゆく。なお，本稿は 2000 年 10 月から 2013 年 2 月にかけて，筆者がイスラエルのガリラヤ地方で断続的におこなってきた調査の結果をまとめたものである。ユダヤ教とイスラームが支配的な地域で豚を話題にのせることは，相手がキリスト教徒であっても気を遣わねばならず，調査は困難をきわめた。サンプル数が少ない状態で分析をおこなっているが，それは豚肉の生産・流通・消費にかかわる者の絶対数の少なさと，イスラーム世界における豚にまつわる話題の隠匿性を物語っている。キリスト教徒しかいない集落であっても，豚についての話題がおおっぴらに語られる訳ではないという点に，イスラーム世界における豚の忌避の厳重さがあらわれている。

聞き取り調査の対象は，イスラエル第三の都市ハイファ（Haifā, حيفا）と，レバノン国境に近いキリスト教徒村ファッスータ（Fassūṭa, فسوطة）に居住する人びとである。そのうちハイファに住む人びとの多くは，ファッスータやその他のガリラヤ地方の農村で生まれ育ち，10 代でハイファに出稼ぎ者として移住した者とその子ども世代が大半を占め，イスラエルの都市部に住むアラブ人市民の典型例といえる。ハイファはガリラヤ地方全体に影響を与える地域の中心であるため，彼らから得たデータもまた，一般性が保たれているといえよう。うちムスリムの具体的な事例は 2 件紹介しているのみであるが，イスラーム世界における豚のタブー性を考慮すれば，聞き取りができたこと自体が大きな成果といってよい。両方とも特殊な事例ではあるが，その特殊性を紹介するだけでも価値があると考え，使用することとした。

2　イスラエル・ガリラヤ地方における豚肉の生産と消費

本章ではイスラエル側のガリラヤ地方における，豚肉の生産と流通，消費の様態を紹介する。主な担い手となっているのは，西岸と同じくキリスト教徒であるが，イス

ラエルに属することや教派の違いによって，豚肉の扱いにも相違がみられた。

2.1　ガリラヤ地方のアラブ人キリスト教徒を中心とした豚肉生産・消費

2.1.1　イスラエルにおける養豚・豚肉産業の歴史

イスラエルはシオニズムに基くユダヤ人国家であるが，人口の約 8 割を占めるユダヤ人市民のほとんどが，全世界からの移民とその子孫である。従って，食文化を含めてその文化的背景は多様であり，ユダヤ教の戒律が遵守される度合いも異なっていた。ムスリムと共存していた中東系ユダヤ人は，今でも豚肉を忌避する傾向があるが，欧米出身のユダヤ人のなかには，豚肉食に抵抗を感じない世俗派も数多くいた。

1948 年の建国後，移民の大量流入によって，イスラエルは深刻な食糧難に陥った。これを打開するため，多産で成熟までの日数が短い豚を食用に用いることが検討され，いくつかのキブーツで養豚が開始された。なかでもガリラヤ地方中部のキブーツ・ミズラァ（Mizra‘a, מזרע, ヘブライ語で「農場」の意）が有名である。ミズラァでは 1950 年代中盤に養豚がはじめられ[4]，近隣の都市ナザレに居住するアラブ人キリスト教徒の加工技術も取り入れて，ミズラァの養豚産業はイスラエル中にその名を知られるまでになった（Ashkenazi 2007; 中村 2015: 73–75）。

ところが 1962 年，イスラエルでは養豚禁止法が定められ，ガリラヤ地方のアラブ人キリスト教徒居住地域など例外地域以外での養豚は法律で禁じられた。コシェルのライセンスを保有する大手企業による市場独占の動きが活発化し，政府に対して非コシェル産業への圧力をかけるよう，働きかけがおこなわれた結果である。この動きは，シオニズムを掲げるユダヤ人国家としてのイスラエルが，ユダヤ教的な正統性を獲得するためのプロセスでもあった。ミズラァではその後も養豚業はおこなわれていたが，ソ連邦崩壊にともなうロシア系移民の大量流入によって，決定的な打撃を被った。豚肉食を好むロシア系移民の需要にあわせ，ロシアから豚肉加工品が輸入されるようになり，大手スーパーマーケットのティヴ・タアム（Tiv Ta’am, ט‘ב טעם, ヘブライ語で「美味」の意）と提携した結果，ミズラァの養豚事業部は買収された。ミズラァでは現在は養豚はおこなわれておらず，（おそらくはティヴ・タアムの下請けとして）豚肉の加工をおこなっているのみである（Ashkenazi 2007, 中村 2015: 70–71, 76–77）。

ほとんどのキブーツが養豚業から撤退するいっぽうで，研究機関として養豚を続けたキブーツも存在する。研究目的での養豚は，養豚禁止法の適用外とされたためである。この道を選択したのがネゲヴ北部に位置するキブーツ・ラハヴ（lahav, להב）であり，現在イスラエル国内で唯一のユダヤ人が経営する養豚場となっている。

キブーツ・ラハヴでは，キブーツの構成員のほかに，豚肉を扱うことに抵抗のないロシアや南米からの移民が労働力として入り，養豚業を支えている。養豚業に従事する者の中には，コシェルを遵守する者もいればしない者もいる。資金不足に悩まされながらも，建国当時の食糧難を支えた伝統ある産業にたずさわることに，彼らは誇りを持っているという（Yoskowitz 2008）。

2.1.2　アラブ人キリスト教徒を中心とした豚肉生産・消費

イスラエルの人口の約 2 割は，アラブ人市民が占めている。調査をおこなった 2013 年の年末のデータでは，イスラエル国内のアラブ人人口は約 169 万人であり，このうち 8％ほどをキリスト教徒が占める。1962 年の養豚禁止法の施行以来，イスラエルにおける豚肉流通・消費の主力は，このアラブ人キリスト教徒である。彼らの多くは，都市部のアラブ人居住地区や村落に，ムスリムや低所得層のユダヤ人市民と混住している。また，ガリラヤ地方に二か所のみ存在する，キリスト教徒のみの村落で暮らしている者たちもおり，そのうちのひとつが本稿の調査地のひとつであるファッスータである。本稿のもうひとつの調査地であるハイファはキリスト教徒が多く居住する街として知られ，市の総人口に占める比率は 14％と，わずか 4％のムスリムよりも例外的に多い[5)]。これは，ハイファにガリラヤ地方の最大宗派であるメルキト派カトリック教会の大司教座や，ローマ・カトリック教会の司教座と修道院など，キリスト教の重要施設が集中していることが大きな要因となっている。歴史的要因としてはほかにも，ハイファ旧市街の開発をおこなった 18 世紀のアッカ総督ザーヒル・アル・ウマルによるキリスト教徒，ことにメルキト派カトリック信徒の優遇や，それにともなうメルキト派カトリック信徒のシリア，レバノンからの大規模移住が挙げられる（菅瀬 2009）。また，ファッスータはガリラヤ地方に二村のみ残るキリスト教徒のみが居住する村である。このため，村民の意見からは，ムスリムに影響されないキリスト教徒の見解を導き出すことができる。

パレスチナ自治区では，キリスト教徒が居住している地域のなかでもごく限られた場所でのみ，豚肉を購入することが可能である。しかしながらガリラヤ地方では，豚肉はさらに入手が容易であり，堂々と消費されている。

ハイファにおけるアラブ人市民のおもな居住地区は，ワーディ・ニスナースとその周辺の，いわゆるダウンタウンと呼ばれている古い街区である。ワーディ・ニスナースの中心部には市場があり，ここには大小 5 軒ほどの精肉店が散在している。このうち，もっとも大きな精肉店と二番目に大きな新しい精肉店は，豚肉を主力商品として

販売している。筆者はこのうち前者の，歴史も古く規模も大きい精肉店を調査した。

ガリラヤ地方のみならず，イスラエルでは各地で豚が飼育されている。これらの豚は出荷時期がくると豚専門の食肉加工場に運ばれ，加工される。豚専門の食肉加工場はガリラヤ地方に 2 か所，イビッリーン（‘Ibillīn, عبلين）とマイリヤ（Ma‘liyā, معليا）にある。これらはいずれもキリスト教徒が多く居住する村であり，ことにマイリヤは，ファッスータとともにキリスト教徒のみが居住する村である。これら二か所の豚専門食肉加工場は，食肉業者以外にはいっさい門戸を閉ざしており，直接調査することはできなかった[6]。ハイファで豚肉を扱う精肉店は，いずれもイビッリーンの加工場から豚肉を仕入れている。調査した精肉店は，店舗と自社加工場をワーディ・ニスナースに持っており，毎朝イビッリーンの加工場からトラックで運搬してきた豚肉をまず自社加工場に運び込み（写真 1 参照），そこで加工を済ませた豚肉を，向かいの店舗で販売している（写真 2 参照）。

精肉店のオーナーはメルキト派カトリック信徒であり，店舗で働いている店員 3 名やほとんどの従業員も同じくメルキト派を中心としたキリスト教徒である。しかし，自社加工場で働いている 20 名のうち，3 名は驚くべきことにムスリム，1 名はロシア系新移民であった。さらに驚くべきことに，豚肉を積んだトラックは市場の狭い道に駐車して，堂々と豚肉の積み下ろしをしている。豚肉は羊肉に比べると全体的に白っ

写真 1　ハイファのワーディ・ニスナースの路上で，トラックから積み下ろされる豚肉。2013 年 2 月 21 日，ハイファにて撮影。

ぽく脂肪が目立つため[7]，誰の目からみても積み荷が豚肉であることはあきらかである。しかも通りにはムスリムも往来するというのに，隠す様子はまったくない。また，店での豚肉の陳列方法にも，豚肉を隠したり，羊など他の肉と分けて置こうとしたりする配慮はいっさいみられなかった。豚の頭が堂々とケース内に置かれていたほどである（写真 3 参照）。

2.2　豚肉を扱い，食すことに対する意識：アラブ人キリスト教徒の場合

本項では，豚肉に対するアラブ人キリスト教徒の意識についてまとめてみたい。ハイファおよびファッスータのキリスト教徒に聞き取りをおこなうと，豚肉食への反応は 3 種類に分類することができた。なお現段階では，聞き取り対象がアラブ人キリスト教徒と一部のムスリム，ロシア系移民に限定されていることを言い添えておく。

2.2.1　豚を決して食べない人びと

キリスト教徒のなかでも中高年層，ことに女性は豚肉を忌避する者がほとんどである。彼らは一様に，「豚なんて一度も食べたことがない。食べようとすら思ったことがない」と主張し，その理由を「不浄だから」と述べた。

70 代前半のファッスータ出身，ハイファ在住の女性 A は，豚の禁忌について，こ

写真 2　ワーディ・ニスナースの精肉店。豚肉とその加工品のみならず，羊や鶏，牛も扱う。2013 年 2 月 21 日，ハイファにて撮影。

のように語る。彼女は結婚時に改宗して東方正教徒となったが，もとはメルキト派カトリック信徒であり，彼女自身は今でもカトリックであると考えている。

ムスリムが豚肉を禁忌としたのには，それなりの理由があったはずよ。たとえば寄生虫とかね。今は（科学が発展して）豚肉に寄生虫がいて危険だってことを皆が知っているけれど，当時はどうやって知ったの？　ムスリムはきっと，なんらかの方法で知っていたのよ。豚肉に虫がいて，不浄だってことをね。ならば私たちも，それに従ったほうがいいわ。

さらに彼女は，豚を食べることを忌避する理由として，周囲の視線と豚肉そのものの臭いを挙げる。

A：この集合住宅には，ムスリムも住んでいるでしょ。豚を焼けば，臭いで彼らにわかってしまうわ。それに私も，豚の臭いは好きじゃない。あの臭い！　触りたくもないわ！

筆者：でも，なぜムスリムは豚肉の臭いを判別できるの？　彼らは食べないのに。

写真 3　写真 2 の精肉店のショーケース。豚の頭が堂々と置かれている。2013 年 2 月 21 日，ハイファにて撮影。

A：食べなくても知っているのよ！　臭いから食べないのよ。臭いから，不浄とされたのよ。決まっているでしょう！

2013年の時点で，この集合住宅に入居しているのは7世帯であり，うち5世帯がAの家を含めてキリスト教徒，2世帯がムスリムである。ムスリム世帯のうち1世帯はAとも親交が深く，実は豚肉を以前から常食している。この世帯主のGについては後述する。しかしもう1世帯は2007年に入居してきた人びとで，Aのみならず，1980年代から集合住宅に入居しているほかの世帯ともほとんど交流がない。彼らは豚肉を食べない（と考えられている）ため，彼女が気を遣っているのはこの家族のことである。

また，Aには70代中盤の夫がいるが，彼とは30年来の家庭不和のため，食事をともにとることはない。この夫Fについても後述するが，しばしば豚肉を購入してみずから調理して食しており，そのことにAは強い不快感をおぼえている。台所は共有しているため，「（宗教的にも物理的にも）不潔な豚肉を，共用の台所で調理してほしくない」というのがAの本音である。夫が豚肉を買ってくるたびに，台所では激しい言い争いが展開された。そのときに彼女がくどいほどに叫んでいたのが，「豚は汚れているのに，なぜ洗わないで煮るの！」というひとことであった。

Aとも姻戚関係にある60代前半のファッスータ在住の女性Bもまた，豚肉を食さない。彼女はメルキト派カトリック信徒である。豚肉と，肉を食べるという行為全体について，Bは以下のように語る。

お肉は好きよ。お肉がないと食事にならないからね。息子たちは魚のほうが好きだけれど，夫と私はお肉のほうが好き。羊が好きだし，よく料理するわ。本音を言えば山羊が別格だけれど，あれはたまにしか手に入らないごちそうだから。豚は（親戚が営んでいる）精肉店にいつも置いてあるけれど，うちでは買わないわね。食べたこともないわ。

彼女の語りからは，この地域の食事，ことに家族が集う場の食事やもてなし料理における肉の重要性がうかがえる。イスラームの宗教儀礼における肉の重要性は1で述べたが，キリスト教徒にも肉の重要性は共有されていることがわかる。

ファッスータで豚肉を扱っている精肉店は，Bの長男の妻の実家であり，B自身の母方の遠戚でもある。親族が経営する店だけに，「品質は折り紙付き」と彼女は保証

表 1　ガリラヤ地方における食肉の 1 kg あたりの販売価格比較

肉の種類	値段（シェケル，円）
山羊	120 シェケル（3,360 円）以上
羊	50 ～ 60 シェケル（1,400 ～ 1,680 円）
牛	40 ～ 45 シェケル（1,120 ～ 1,260 円）
豚	35 シェケル（980 円）
豚足	5 ～ 10 シェケル（140 ～ 280 円）

するが，豚肉だけは買わないと語る。その理由を尋ねると，彼女は「考えただけでぞっとする」と身震いし，それ以上は語るのも気分が悪いと苦笑して，インタビューをみずから打ち切った。

ところで，B の語りには食肉として山羊が好まれるという話が登場するが，ファッスータでは実際に山羊の放牧が現在もおこなわれ，2013 年の時点では 300 頭ほどが飼育されていた。羊ではなく山羊が好まれるのは，ファッスータが山間部の村であるためである。その肉は最高のごちそうとして珍重されるほか，乳や皮革も利用されている。ただし，その肉はこの地域で常食されている肉の中では突出して高価であり，高級な肉とみなされる羊と比較しても，その倍以上の値段である（表 1 参照）。村でも父系親族集団の指導者クラスの者が逝去した後の葬儀ミサなど，賓客をもてなす時でなければ手に入れることができない。いっぽう，豚が飼育されているという話は，村ではきかれなかった。かつては飼育している家もあったようだが，農業自体が衰退している現在，家で家畜を飼う者は減少している。

B は村の中でも料理上手として知られ，親戚の女性たちがしばしば料理のアドバイスをもらいに，彼女のもとを訪れる。そのたびにコーヒーを出し，料理の話題に興じるが，B のもとに集う女性たちはいずれも豚肉を食べることに強い拒絶反応を示した。その理由を箇条書きすると，以下のようになる。

・村の外から運ばれてきたものだから，どんなふうに育てられているのか，どんな処理を施されているのかわからず，不安をおぼえる。（60 代女性，ファッスータ出身・在住）
・豚を食べる習慣はもともとない。豚を飼っていた女性は昔近所にいたけれど，うちは飼ったことはない。山羊や羊に満足しているのだから，わざわざ食べる気も起らない。（70 代と 40 代の女性，ファッスータ出身・在住）
・昔は夫が野豚猟をしていたので，夫は食べていたが，私は臭いがいやで口にしなかった。家族でアメリカを旅行したときも，夫と息子は豚肉を食べていたけれど，私

は食べなかった。海外にいようとイスラエルにいようと，食べたくないものは食べない。（50 代女性，ファッスータ出身・在住）

・ナザレではたまに食べるけれど，ファッスータの実家に戻ってきたときは食べない。なぜなら実家では出てこないし，ここで豚肉を買う理由もないから。（40 代女性，ファッスータ出身，ナザレ在住。彼女は B の長女であるため，「実家」とは B の家のことをさす。）

ファッスータの中高年女性は豚肉食に嫌悪感を抱いており，ムスリムが存在しない村で暮らしていても，伝統的なキリスト教徒社会では豚肉を忌避する傾向が強いことがわかる。豚を拒絶する理由を概観すると，「家や村の外から来たもの」に対する嫌悪感が見え隠れする。「村の外で育てられ，加工されたものだから信頼できない」というのが彼女たちの挙げる理由であるが，その発言は「家の中，村の中で育てられ，加工されたものなら安心」という価値観に裏打ちされている。住民のすべてがメルキト派カトリック信徒であり，いまだに父系親族集団間の関係構築のための婚姻が重視されるファッスータでは，このように身内（＝父系親族集団，村，キリスト教徒）と部外者（＝異なる父系親族集団，非ファッスータ出身者，非キリスト教徒）の区別が厳重であり，都市部に住む出身者にも大きな影響を与えている（菅瀬 2009）。本稿では以下より彼らの概念による身内を「ウチ」，出身地や居住地，父系親族集団の範疇外のものを「ソト」と呼ぶ。この「ウチ」と「ソト」の区別の厳重さが，豚を拒絶する感情を強めているといえる。

2.2.2　豚を食べたことはあるが，常食しない人びと

豚肉を食したことがあるが，常食しない人びとの多くが女性である。総じて若年期から壮年期にかけての世代のキリスト教徒は，男女を問わず豚肉を食べた経験が一度ならずある。しかしながら，後述するように男性はすすんで豚肉を消費するものの，女性はみずから購入したり，会食の場で注文したりする例はみられなかった。

40 代中盤のハイファ出身・在住の教職員 C とその母親である 70 代の D は，豚を忌避する理由について次のように語る。彼女たちは東方正教徒である。

> C：豚肉がおいしいことは知っているわ。パーティで出てきて，何度も食べたことあるもの。でも，自分で買ってくることはないわね。もともとあまりお肉は食べないし，どうせ食べるなら羊のほうがずっといいに決まっているから。

D：そうね，うちでも料理するときは，必ず羊を買うわね。それから，たまにSが来るし。彼女には作ったものをおすそ分けすることもあるからね。

C：ママ，マナイーシュ[8] にはお肉を使わないわよ。

D：台所に豚がないほうが安全でしょ。

彼女たちの会話に登場するSとは，近所に住むモロッコ系ユダヤ人の老女である。CとDの親子が住むアッバース地区には，Aが住むワーディ・ニスナース地区とは異なり，中東系のユダヤ人市民も多く住む。筆者も別の調査でSにインタビューを取ったことがあるが，コシェルを遵守する生活を送っていた。彼女と共食するためにも，豚肉は買わないほうがよいとDは言うが，彼女自身あまり豚肉は好きではないとも語る。

同じくアッバース地区に住む30代中盤の女性Eもまた，以下のように語った。彼女の発言に登場する夫とはAの長男であり，彼らはみな東方正教徒である。

肉は好きよ。（筆者とはよく一緒に食事をするから）知っているでしょう？肉を食べずにいるなんて信じられない！[9]　でも，豚は自分では買わないわ。だって焼くと独特の臭いがするし，近所に迷惑だもの。このあたりは，ユダヤ人もムスリムもたくさん住んでいるからね。それに，夫は食べるものにうるさくて，羊と鶏の胸肉しか食べないもの。外食するときも，頼まないわね。そもそも豚があるようなところに食事に行かないもの。

彼女が豚を忌避する理由の前半部分は，彼女の姑であるAとほぼ同じである。ハイファのなかでも，ムスリムとキリスト教徒，ユダヤ人市民が混住する地域に住んでいる彼女にとって「近所」の住民とは，同じキリスト教徒よりもむしろムスリムやユダヤ人を意味する。長く共存してきた歴史があるだけに，キリスト教徒は隣人たち，ことに同じアラブ人であるムスリムとのトラブルを回避したいと考えている。豚肉を食することは，ムスリムとの良好な関係をそこないかねない危険性があり，その危険を冒すほどの価値があるとは思われていないことがわかる。

2.2.3　好んで豚を食べる人びと

豚を好んで食べるのは，圧倒的に若年層，ことに男性に多い。彼らは総じて肉食を好み，週末になると各家庭で親戚や友人を集め，ケバブをすることを楽しみとしてい

る。そのような場で好まれるのは圧倒的に羊肉であるが，豚肉も値段が安い，味が良い，栄養価が高いという理由で供されることがある。羊のように串焼きのケバブにするか，骨付きステーキとして供されることが多い。

しかしながら，筆者が調査した限りでは，豚肉を家族ぐるみで食べ，積極的に料理するという事例はハイファでもファッスータでもみられなかった。豚肉を好んで食べる 70 代中盤の男性 F は，家族に調理を拒否され，自分で料理していると語る。彼は A の夫で，東方正教徒である。

F：豚を食べる理由？　うまいからさ。それに安いからね。豚足の値段を知っているだろう？　あんなに安くて，健康によいものはないぞ！

筆者：健康によい？　それはどこで知ったんですか？

F：さあ？　TV か，ラジオだったかな。みなそう言ってるだろう。

筆者：豚足は，いつごろから食べていますか？

F：15 年ほど前からかな。それ以前はソーセージを焼いていたんだが，あれは臭い。A や（当時はまだ家にいた）娘が文句を言ってうるさいからやめた。豚足は煮れば臭いがなくなるからな。君も食べてみるといい！

前述のように，F は妻の A と折り合いが悪く，自分の食べるものは自分で調理しているが，豚足を週に 1，2 回の割合で買ってきて調理する姿がみられた（写真 4 参照）。調理法は塩味をつけてただ茹でるだけという，非常にシンプルなものであるが（写真 5 参照），A には汚らしくて臭いとことあるごとに文句を言われ，実際に独特の臭いが家じゅうに充満した。A の批判には宗教的な穢れという意味のほかに，F がろくに豚足を洗わずに調理してしまうという，衛生的な汚れの意味も含まれている。なお，この場合の宗教的な穢れとはイスラーム的な観点によるものであり，イスラームの価値観に影響を受けた，中東のキリスト教徒特有の感情が見て取れる。

F が豚を食べる理由に，それほど強い根拠があるようには読み取れない。豚肉の栄養価についても，彼は具体的な知識を持っている訳ではない。彼が豚を買うのは，その安価さと，できるだけ経済的負担のかからない方法で肉を食べたいという気持ちからであろう。なかでも豚足を彼が好むのは，ふつうの豚肉のさらに 1/4 以下という安価さによるところが大きい（表 1 参照）。定職がなく，現在は年金のみで食費をまかなっている F にとって，豚足は貴重な食材なのである。

豚を食べるキリスト教徒の特徴は，自分の手で料理してひとりで食するか，キリス

写真 4　豚足を調理し，食べるキリスト教徒男性。2013 年 2 月 20 日，ハイファにて撮影。

写真 5　写真 4 の男性が食べている豚足の煮込み。2013 年 2 月 20 日，ハイファにて撮影。

ト教徒の，しかも豚肉を好む仲間内だけで食べるということである。つまり，ムスリムなど豚肉を不快と感じる他者の目の前では決して口にしないという点は，豚を忌避するか，積極的には食べないキリスト教徒と同じである。豚肉を入手しやすい環境で生活していても，キリスト教徒が豚肉を口にするとき，常にムスリムをはじめとした他者の視線を意識していることにかわりはないといえる。

2.3　豚肉を扱い，食すことに対する意識：ムスリムの場合

2.3.1　豚肉を常食するムスリムの事例

A と同じ集合住宅に住み，30 年近くの交流があるムスリム一家の世帯主 G は，ガリラヤ地方南西部の村ウンム・アル・ファハム出身，ハイファ在住の 60 代男性である。彼は高校卒業とともにイスラエル警察に就職し，数年前に引退するまで勤務し続けた。

彼は豚を食べることに抵抗感を抱いていない。豚肉を食すことと，ムスリムとしての自身の見解について，彼は以下のように語った。

G：豚はたまに買って食べるよ。特に家族が集まるとき，オーブンで焼いているよ。

筆者：お酒も飲んでいますよね。前に私に，ワインオープナーを借りに来たのを覚えていますか？　驚きました。

G：ああ，ワインもビールも飲むよ。

筆者：でも，ムスリムは豚を食べてはいけないはずでは？

G：別に悪いことだとは思っていないよ。信心っていうのは，神様と個人の対話だ。人間には，豚を食べないことよりも守るべき重要なことがある。俺はラマダーン月の断食は必ずおこなってきたし，礼拝も毎日欠かさずしている。警察に勤めて市民を守り，女房も子どもも養ってきた。毎日飲んだくれている F とは違うよ！

筆者：豚を食べるようになったのは，いつからですか？　ウンム・アル・ファハムでは，もちろん食べませんでしたよね？

G：もちろん食べないよ！　村には豚すら存在していないからね。食べ始めたのは，さあ，いつだったかなあ。20 年前か，もっと前か。子どもたちが大きくなるころにはもう食べていたし，ビールも飲んでいたよ。ワーディ・ニスナースで，ふつうに買えるからね。

筆者：じゃあ，ハイファに来てからですよね。

G：ああ，そうだ。この家には，1985 年から住んでるよ。

彼は豚を食べ始めた経緯について，あまり詳しくは語りたがらなかったが，ハイファに移住してからのことであり，食べ始めてもう長い年月が経っていることは認めた。また，G の一家はキリスト教徒が経営する近所の中華料理店の常連であり，そこで豚を食べるとも語っている。自宅で豚肉を調理する場合はいつも，ワーディ・ニスナースの前述の精肉店で，彼自身が購入しているという。肉に限らず，彼は食料と日用品の買い出しをすべて自分でやっており，「それは男の仕事だ」と胸を張る。彼の息子たち 4 人はいずれも独立し，それぞれ結婚してハイファ市内に住んでいるが，うち 2 名とその家族は今も豚肉を食べていることを確認できた。ことに末の息子は父親と同じく，近所の中華料理店でしばしば食事をすることを楽しみにしていた。

前述の精肉店で働くムスリムの従業員 3 名の間では，豚肉食に対する意識に個人の間で微妙な相違がみられた。うち 1 名は 40 代後半の中年男性であったが，彼は「売り物として扱うだけで，自分は食べない。食べることを考えたこともない」と語り，本心では豚肉を扱う仕事に就いていることに嫌悪感をおぼえていることをほのめかした。残る 2 名はいずれも 20 代の未婚の若者であるが，彼らはいずれも豚肉を食べる。そのうちの一人である H の語りは，F のそれと近似する。彼は豚肉を調理することを，家族に嫌がられていると語った。

H：うちで豚を食べるのは，俺ひとりだね。おやじとおふくろは絶対に食べない。両親は敬虔なムスリムだから，そりゃあ嫌がるね。でも俺は食べるよ。うまいからね。

筆者：料理は誰がしているの？

H：もちろん，自分でするよ。フライパンも，豚用のを用意しているんだ。いや，うちにあるやつで豚を焼いちまったから，おふくろが激怒して，それを使うことになっているんだけれど。（聞いていた前出の 40 代同僚が呆れて苦笑する。）

筆者：ムスリムであることと，豚を食べることに矛盾は感じない？

H：俺はあんまり宗教心に篤くはないよ。だから別に，良心の呵責はおぼえない。両親もうるさくは言わないよ。だって，俺の稼ぎで生活してるんだしね。

イスラームでは，ハラールと認められた食品がハラームと同じ場所に置かれたり，

同じ生産ラインで扱われたりすると，そのハラール性は失われるとされている。つまり，豚肉を扱う精肉店で売られている羊や牛，鶏の肉は，たとえそれが食肉に加工された時点でハラールであったとしても，豚肉と同じ場所に置かれただけで，ハラールではなくなってしまう。しかしながら，豚肉を扱う精肉店のほとんどでは，豚肉とそれ以外の肉を同一のショーケースにおさめて売っており，地元のムスリムはそのことに抵抗感を感じていない。ハイファのこれらの精肉店には近隣のムスリムたちが日常的に肉を買いに来る。ハラールにこだわる敬虔な者たちは，郊外のムスリムの村に肉を仕入れに出かけるというが，それぞれ生業を持っている彼らにそれほど時間的余裕があるとは考えられず，実際に今回インタビューを取ったムスリムのうち，郊外のムスリムの村にハラール肉を仕入れに行くと答えた者はひとりもいなかった。農村から都市へ移住し，世俗的なユダヤ人市民や，豚を食べるキリスト教徒に混じって暮らすうちに，ムスリムの生活も世俗化し，ユダヤ人市民やキリスト教徒のそれに同化していったのである。

2.3.2　ムスリムが豚肉を食べる理由

ここで，ガリラヤ地方のムスリムが豚肉を食べる理由を整理しておきたい。ムスリムが豚肉を食べる理由として考えられるのは，以下の 5 点である。

①キリスト教徒の影響

キリスト教徒は，多くの場合ムスリムと混住している。このためキリスト教徒の価値観が，ムスリムの価値観に影響を与える事例は，多岐にわたってみられる。たとえば，イスラームの聖者アル・ハディルはムスリムとキリスト教徒の双方に崇敬されているが，キリスト教徒は彼を旧約聖書に登場する預言者エリヤや，キリスト教初期教会の殉教者ゲオルギオスと同一視している。イスラームにおけるアル・ハディルは，白髯の老人というイメージをともなっているにもかかわらず，歴史的パレスチナでは多くのムスリムが，竜を退治する騎馬の騎士という，ゲオルギオスの姿でアル・ハディルを思い描いている（菅瀬 2012: 19）。聖者アル・ハディル崇敬と同じく，食文化においてもキリスト教徒の影響がみられ，キリスト教徒が金曜日に食する料理ムジャッダラを，ムスリムも同じく金曜日に料理する傾向がみられる（菅瀬 2013）。

②豚肉の安価さ（安く肉を食べたいという気持ち）

本稿では取り上げていないが，西岸のベイト・ジャーラにあるキリスト教徒経営の豚肉専門小売店を調査した際，豚肉を購入する理由として，すべての客が安価であることを挙げた。

イスラーム世界の一部であるパレスチナの食文化において，肉が非常に重要な地位を占めていることは，1.3 で述べた。肉は物質的・精神的豊かさの象徴であり，コメと混ぜて野菜に詰めたりして食される挽肉と，ケバブやオーブン焼きなどで食されるかたまり肉は明確に区別され，「肉を食べる」とは後者を意味する。生活が苦しくとも，週に一度は肉を食べたいと願う人びとにとって，安価な豚肉は需要がある。キリスト教徒と混住している地域のムスリムの中には，安く肉を食べたいという気持ちから，秘密裏に豚肉を入手して食べる者がいる。豚に対する禁忌の強さゆえに，聞き取り調査で彼らの実態をあぶり出すことは非常に困難であるが，一定数が存在すると，豚肉専門小売店の店主と客は語った。

③世俗国家としてのイスラエルの影響

イスラエルはユダヤ教の規範が市民生活に大きな影響を及ぼしながらも，あくまで世俗国家であり，実際には豚肉の入手も容易である。キリスト教徒地区や，この項の最後に触れるロシア系移民の居住地域に行けば，豚肉は誰でも手に入れられる。また，ムスリムとキリスト教徒，ロシア系移民は一見区別がつかないため，購入の際に他者の視線を気にする必要がない。

④西岸と比較して富裕で行動の自由が許された生活，食についての知識の多さ

イスラエル統計局によれば，2014 年の時点で，イスラエルの貧困者の割合は全人口の 21.8％といわれており，アラブ人市民に限定すれば，その人口の約半数が貧困者に分類される。ただし，近年はゆるやかに改善傾向にあり，2012 年には 54.4％が貧困者であったが，2013 年には 47.4％に改善されている[10)]。ちなみにアラブ人（パレスチナ人）の平均日当は，イスラエル側で 172.1 シェケル，西岸で 88.6 シェケルであり[11)]，イスラエル側のガリラヤ地方と西岸では，経済的に大きな格差がある。パレスチナ自治区よりも生活水準が高く，行動も制限されないアラブ人市民は，宗教の別を問わず頻繁に欧米へ旅行に出かける。これはディアスポラ状態にある親族を訪ねることが目的である場合もあるが，多くの場合は娯楽のためである。これらの国で豚肉を食べ，その味をおぼえて帰ってきたというのも，豚肉食が受け入れられつつある理由として挙げられる。筆者の聞き取りでは，ギリシャのギロスやスペインの生ハム，ドイツのソーセージなどが契機となったという声が聞かれた。また，豚肉のすぐれた栄養バランスが，一般教養として知られるようになったことも，要因のひとつであろう。

なお，「富裕ゆえ豚肉を食べる」という理由は，②で挙げた「安く肉を食べたい気持ちから豚肉を食べる」という理由と一見矛盾する。しかしながら，豚肉を口にするようになった契機こそ違え，豚肉を習慣的に食べるようになるという結果は同じであ

る。一人の人間が，「安上がりに肉を食べたいから豚を買おう」と思うことと，「ギリシャ旅行で豚肉を食べるのが楽しみ」と思うことは，矛盾しないといえる。

⑤戒律についての自己解釈と正当化

G と H の語りに共通するのは，「ほかの戒律を守っている／人としてまっとうに働いて暮らしているのだから，豚を食べることくらいは許されるだろう」と，戒律の遵守について自己解釈をし，本人なりの正当化をはかっている点である。G が引き合いに出しているのが，キリスト教徒の間でも評判の悪い F であるということからも，正当化の重要性がうかがえる。G や H の住むワーディ・ニスナースにはモスクが存在せず，この地域のムスリムは金曜日の集団礼拝にもあまり熱心ではない。宗教的な戒律の遵守は自己管理に任されることになり，このような正当化をおこなう余地を生んだと考えられる。

2.4　豚肉食とロシア系移民

ロシア系移民についても，簡単に触れておきたい。彼らはユダヤ人としてイスラエルに受け容れられ，いまや総人口の 2 割以上，アラブ人市民に匹敵するほどの人数がイスラエル各地に居住してはいるが，実際には大半の者がロシア正教徒である。精肉店で働くロシア系移民の従業員も，ロシア正教徒であった。そのため豚肉は常食しており，商品として扱うことにもなんら支障を感じてはいないという。実際，前述のワーディ・ニスナースの豚肉を扱う精肉店では，パッケージにロシア語とヘブライ語が併記された豚肉加工品が売られており（写真 6 参照）ロシア系移民を対象として販売していることがわかる。さらに，これらの商品にはヘブライ語のみではあるが，豚肉を使用していることが明記されている。これはヘブライ語を母語とし，ロシア語を介さないユダヤ人市民向けの表記であろう。

2.5　狩猟と農業の衰退が豚肉食に与えた影響

筆者はキリスト教徒の間でも，豚肉食に対する忌避が中高年女性を中心に強くみられ，その忌避が「ウチ」と「ソト」をめぐる区分にあると述べた。しかしながら，彼女たちの配偶者である中高年男性は，豚肉に対してまた異なる見解を示す。その見解は，この数十年で豚肉の概念が大きく変化した可能性を示唆している。

中高年男性もまた，豚肉を買って食べることはない。しかしながらそれは，彼らにとって豚肉は元来買うものではなく，狩猟によって得るものであったためである。ガリラヤ地方はアラビア語でバッルート（ballūt, بلوط），シンディヤナ（syndiyānā, سنديانا）

と呼ばれるブナ科の樹木が多くみられる地域であり，ファッスータ周辺はことに広大な森が広がっている。このため，野生の豚が成育するには適した環境であるといえる。

「昔は豚をよく撃っていたよ」と語るのは，ファッスータ出身・在住の 60 代の男性 I である。彼は A の末弟にあたる。7 人兄弟の末子として生まれた彼は，A ら年上のきょうだいの多くが出稼ぎに出たのとは対照的に，人生のほとんどをファッスータで過ごし，家業の大工を継いで生計を立ててきた。父親の死とともに生家と若干の耕作地を相続し，現在に至る。

豚は耕作地を荒らしに来るんだ。それを鉄砲で撃って，獲物は焼いて食った。大物が捕れたときは，剥製にしたこともあるよ。傷んだので，もう捨てちまったが。

でも，それももう昔の話だ。知ってのとおり，うちはもう小麦も育てていないし，世話しているのはオリーブだけだ。豚を撃つ必要もない。女房もいやがるしね[12)]。だからもうやらないよ。

写真 6　写真 2 の精肉店で売られているハム。パッケージはヘブライ語とロシア語で印刷され，商品によってはロシア語の表記のほうが目立つ。2013 年 2 月 21 日，ハイファにて撮影。

このインタビューは 2013 年ではなく，2001 年冬に取ったものである。1982 年に他界した彼の父親がまだ存命中の話として I は語っているので，彼らが豚を撃っていたのは 1970 年代から 80 年代の話である。2013 年の時点で，ファッスータで豚を狩猟するという話を聞くことはできなかった。

イスラエルでは 1996 年以降，野生動物の保護と密漁の取り締まりのため，狩猟が制限されるようになった。2012 年の法改正により既存の狩猟ライセンスは廃止され，新しいライセンスの取得はくじ引き制になっている（Rosenblum 2012）。また，野豚猟には猟犬が使われるが，2014 年 9 月より猟犬の使用には特別な許可が必要になった[13)]。くじ引きでは，「畑や庭を荒らす動物の駆除」は規制対象外となっており，野豚猟には存続の余地が残されていたのだが，この猟犬の使用の規制により，野豚猟もきびしく規制されることになった。イスラエルにおいて，野豚猟はガリラヤ地方のアラブ農民，おもにキリスト教徒とドルーズによっておこなわれてきた。つまり，近年の法改正による狩猟の制限の対象となったのは，実質彼らであった。

I が語るように，野豚猟の衰退はガリラヤ地方のアラブ農村における，農業の衰退と直結している。現在，アラブ農村の多くが過疎化に悩まされているが，これは今にはじまったことではなく，イスラエル建国当初から 1966 年までガリラヤ地方に敷かれていた軍政に端を発する。軍政下，アラブ人市民は農地の開墾や農村での生産活動を制限されたため，若年～壮年の農民たちは農業を放棄し，出稼ぎ労働者として都市部へ移住するようになった。ファッスータとはじめとした北部のアラブ農村の主要作物はタバコであったが，安価な輸入タバコに押されて現在はほぼ壊滅状態である。ファッスータでは自家消費と村内での販売のみに限定し，2 軒の農家がタバコを栽培しているのみだ。若い労働力の流出が長年にわたって続き，さらに村に残った人びとも農業ではなく，サービス業や自営業で生計を立てるようになったため，現在のガリラヤ地方に専業農家はほとんど存在しない。オリーブや小麦の栽培，山羊の飼育を自家消費用にほそぼそと続けているのみで，I 自身も 2000 年代後半，一時的にオリーブの世話すらやめてしまっていた。親族からは批判を浴びたが，「農業は肉体的に負担が大きい。オリーブオイルなら買えばいいことだし，もう続ける気はない」と当時語っていたが，2016 年にはオリーブの世話を再度自身の手でおこなう姿が確認できた。しかしながら彼の子どもたちに農業を継ぐ者はなく，野豚が荒らしに来るような耕作地は，もはや村から消えつつある。

このような状況により，ファッスータの人びとが野豚の肉を口にする機会は激減した。その代わりに入手できるようになったのが，近隣のマイリヤの食肉加工場で加工

された豚肉であるが，彼らが「村の外から来た豚肉」，すなわち「ソト」の豚肉に対して信頼を置いていないことは，すでに述べた。マイリヤはファッスータと同じくメルキト派カトリック信徒の村であり，婚姻関係も結ばれているのだが，それでも「ソト」とみなされるほど，彼らの「ウチ」と「ソト」の区別は厳しい。野豚もまた村の外から，畑の作物を狙って来るものではあったが，豚の駆除は「土地に根ざす」農民である彼らにとって農作業の一環であり，駆除された豚は仕留めた当人とその周囲でのみ食される。つまり，狩猟で得た野豚の肉は「ウチ」に属するものであるがゆえに，彼らの忌避の対象にはならなかったと考えられる。農業の衰退と狩猟の規制により，豚肉は野豚の肉から養殖の豚の肉に変わり，同時に豚肉食も「ウチ」に属するものから「ソト」に属するものへと変わった。現在の中高年女性にみられる豚忌避の傾向は，ムスリムとの共存を重視したもとからの慣習ではあったが，この社会変化によってより強化されたのではなかろうか。

3　結論：キリスト教徒のアイデンティティと豚肉食，歴史的パレスチナにおける豚肉食の今後

以上でみてきたように，ガリラヤ地方の豚肉生産・流通および消費の主力となっているのは，アラブ人キリスト教徒である。ユダヤ人による養豚業も細々と続けられてはいるが，北部のガリラヤ地方で流通する豚肉は，ほぼアラブ人キリスト教徒によって生産されたものといっても，過言ではない。この地域ではイスラームやユダヤ教が支配的であるにもかかわらず，豚肉食が部分的に受け入れられており，ムスリムですら豚肉産業に従事し，豚肉をためらいなく口にする者が出てきている。彼らムスリムが豚肉を口にする理由としては，キリスト教徒の影響や経済的な余裕，イスラームの戒律についての自己解釈と正当化が挙げられる。これらはいずれも，イスラーム世界ではあるが，イスラエルの支配下にあるガリラヤ地方ならではの特殊な事情に由来している。

また，養豚・屠畜の場はユダヤ人市民やムスリムの目に触れないように隔離されているものの，豚肉の扱いそのものは開放的であることも，ガリラヤ地方の特徴といえる。豚肉市場のまさに中心地であるハイファはワーディ・ニスナースの市場では，ムスリムやユダヤ人市民も利用する場所であるにもかかわらず，ケース内に堂々と豚の頭が置かれ（写真 3 参照），通りで積み下ろされる。イスラーム的・ユダヤ教的価値観から表現すれば，放埒で配慮に欠けるとすらいえる状態である。精肉店にはムスリ

ムの従業員もおり，一部のムスリムは豚を食べることにタブーを感じてはいない。豚を常食しない一般のムスリムですら，豚の扱いに寛容であり，調理器具は別にしても同じ場所で家族が豚肉を食べることを許容するなど，ハラールを徹底的に守ろうとする意識は希薄である。この豚肉に対する開放性は，あきらかにキリスト教徒が主導権を握り，近隣にはロシア系移民も多く居住するハイファのアラブ人居住地区ならではの特徴といえる。そのいっぽうで，キリスト教徒の豚肉に対するイメージは，決して肯定的ではない。豚肉は「宗教的な禁忌に触れるものではないので食べられるが，あえて食べない」あるいは「すすんで食べるべきものではない」とみなされており，キリスト教徒だから積極的に食べるという傾向もみられない。食べるか否かの判断は，あくまで個人に委ねられている。

ガリラヤ地方では，豚肉の生産・流通にかかわっている者の証言は都市部でしか得ることができなかったため，西岸の豚肉生産・流通関係者にみられたような，「土地に根ざす」ことへのこだわりをそこに見出すことはできなかった。しかしながら，農村部では豚肉は元来狩猟で得られたものであり，狩猟は農業の一環であった。そのため，野豚猟とその肉を食べることもまた，農業の一部であったはずであるが，現在農業そのものの衰退と狩猟に対する法の規制により，野豚猟もまた減少している。豚肉を食べるという行為は都市に住む，比較的若い年齢層の者の食文化であり，キリスト教徒であっても農村部に住む者や中高年にはなじみがないか，縁が遠くなってしまった。それはムスリムやユダヤ人市民など，他者との共存のための方策であるとともに，彼らの生業である農業の衰退をも物語っているのである。

さて，本稿の最初に，筆者はキリスト教徒のアイデンティティの深層に，「土地に根ざす」農民としてのアイデンティティがあると述べた。以下からは豚肉食と，「農民であること」を含むキリスト教徒のアイデンティティのかかわりについて，まとめることにしたい。

キリスト教徒にとって豚肉食は，彼ら特有の食文化ではあるが，宗教実践とは直結しておらず，自身の裁量に任された行為である。キリスト教徒が豚を食べるようになったのは，食の禁忌を撤廃して信徒を増やすという初期キリスト教会の方針に従ったというだけではなく，「そこに豚がいたから」にほかならない。キリスト教はいうまでもなく，イスラームが伝播する前の歴史的パレスチナで支配的な地位を占めた宗教であるが，その信徒たちはこの地に定住する農民，あるいは都市民であった。彼らは豚を飼い，あるいは農作物を荒らす野豚を狩猟して，その肉を食べていたのである。

イスラームがこの地の支配的な宗教になると同時に，豚肉食はマイノリティである

キリスト教徒のみの食文化となった。しかしながら，農民としての彼らの生活に大きな変化はなく，農作業の一環として野豚猟の習慣は続き，最大の隣人であるムスリムとの共存を損なわぬよう，ムスリムの目に触れないかたちで豚の飼育はほそぼそと続けられた。この間，狩猟で得られた野豚の肉も飼育される豚の肉もまた，キリスト教徒にとっては「ウチ」の食文化，つまりキリスト教徒の農民という，宗教的にも生業的にも同種の人びとにのみ共有される食文化であった。その状況に大きな変化が訪れた契機こそが，1948 年のイスラエル建国である。

イスラエル建国後に 18 年間にわたってガリラヤ地方に敷かれた軍政のため，キリスト教徒を含めアラブ農村の農業は著しく衰退した。出稼ぎのために若い世代が村から都市部へと流出し，結婚後も農村に戻らず，農業にも従事しないという傾向が強いため，農業人口は高齢化し，農業の衰退に拍車をかけた。結果，畑を荒らす害獣を駆除する目的でおこなわれてきた野豚撃ちはおこなわれなくなり，村で出回る豚肉も，村外の食肉加工場からもたらされる豚肉に取って代わられた。農民は農耕を放棄し，あるいは農業を続けることが困難な状況に追い込まれて，キリスト教徒は農民としての深層のアイデンティティを傷つけられ，豚肉もまた「ソト」の食文化となったのである。

農民としてのキリスト教徒の生活と野豚猟は不可分の関係にあり，豚肉食は「土地に根ざす」農民としての，キリスト教徒の深層のアイデンティティにかかわる食文化であり続けた。しかしながら今日，豚への忌避は中高年層の，しかも農村に暮らす女性に多くみられる。この二点は矛盾しているようであるが，農業の衰退による価値観の変化と説明できる。農業の衰退によって豚肉は「ソト」の食文化となり，時間の経過とともにキリスト教徒の豚肉に対する感情そのものが変化したのである。マジョリティであるムスリムとの共存を重んじるがゆえに，彼らの豚肉観はムスリムの価値観の影響を受けた。その結果が，中高年層の女性にみられる豚忌避ではないかと，筆者は推論する。なぜなら野豚猟で得られる豚肉は，おもに猟の担い手である男性によって消費され，実際筆者の聞き取り調査では野豚を食べた女性の事例を得ることはできなかったのである。また，中高年層の女性はアラブ人市民が困窮していた時代に前半生を送り，養殖豚を食べる機会を得たのは中年期以降である。すでに食に対する概念が固定化された彼女たちは，養殖の豚肉を「ソト」のものとして認識し，拒絶する。

いっぽう，若年層が豚肉食を受け容れているのは，彼らがアラブ人市民の経済状況が改善しはじめてから生まれた世代であるためと説明できる。彼らは世俗国家としてのイスラエルの開放的な面を受け容れ，見慣れない食べ物にもすすんで挑戦する。現

在，若年層のアラブ人市民の間でみられるスシの大流行は，その一例である。

では今後，「ソト」のものとなってしまった養殖の豚肉生産・流通が「土地に根ざす」農民としての，深層の宗教的アイデンティティを刺激するものとして，さかんになる可能性はあるのだろうか。答えは否であろう。

本文では取り上げなかったが，ヨルダン川西岸の養豚場では，養殖の豚肉生産・流通を「土地に根ざす」農民の仕事として尊ぶ傾向がある。しかしながら，その価値観は豚を不浄視しないキリスト教徒にだけ共有されるものであり，ムスリムに共有されることはない。キリスト教徒が存在感を示すとはいえ，歴史的パレスチナにおいて，イスラームに基く価値観は支配的である。西岸の二つの養豚場で顕著であった，外部の者に対する警戒感は，ムスリムとの無用の争いを避けるための自衛策でもある。加えて，現在歴史的パレスチナでもイスラーム主義の台頭がみられる。今後イスラーム主義の勢いが増すことによって，豚肉生産・流通にかかわるキリスト教徒が批判の対象となる可能性はおおいにある。

ガリラヤ地方におけるイスラームの戒律遵守のゆるみが今後も続けば，豚肉を食べるムスリムも多少は増えることが予測される。しかしながら，イスラームにおける豚禁忌が強固である以上，ムスリムの豚肉食は秘密裏におこなわれるしかない。キリスト教徒にとっての豚肉食もまた，農業の衰退に歯止めがきかない現状では「ウチ」のものに戻る可能性はきわめて薄く，「ソト」のものであり続けるであろう。

謝　　辞

本稿は，科学研究費基盤研究（A）「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト（代表：西尾哲夫，平成 24 ～ 26 年）」および東京工業大学大学院イノベーション・マネジメント研究科「ぐるなび」食の未来創成寄付講座食文化共同研究会（代表：阿良田麻里子，平成 24 年～）による研究成果の一部である。また，内容の一部は第 14 回古代・東方キリスト教研究会（平成 25 年 8 月 29 日，於国立民族学博物館）と国立民族学博物館共同研究「肉食行為の研究」研究会（代表：野林厚志，平成 25 年 12 月 21 日，於国立民族学博物館）における発表の内容を改稿・増補したものである。高橋英海先生，戸田聡先生，野林厚志先生，池谷和信先生，阿良田麻里子先生をはじめ，多くの方がたにコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい。

注

1）　ただし，パレスチナの経済状態は長年停滞しており，親しい友人相手であれば鶏肉料理も立派なもてなし料理になると考えられている。
2）　マルコによる福音書 5 章。ほかにもマタイによる福音書 8 章 28 ～ 34 節，ルカによる福音

書 8 章 26 ～ 39 節にも，同様の記述がみられる。

3）　使徒言行録 10 章 9 ～ 16 節。ペトロ（ペテロ）の幻視の物語が語られている。彼が空腹をおぼえると，「あらゆる獣，地を這うもの，空の鳥」が入った入れ物が天から降りてくる。しかしペトロがそれらを清くないと拒絶すると，天から「神が清めた物を，清くないなどと，あなたは言ってはならない」という声が返ってきて，入れ物は天に引き上げられた。この記述は，ペトロが布教活動の初期にはユダヤ教の食規定に従っていたことを示しており，キリスト教会ではその必要はないという解釈が示されているという。第 14 回古代・東方キリスト教研究会（平成 25 年 8 月 29 日，於国立民族学博物館）での議論より。

4）　アシュケナズィーによれば 1957 年，中村によれば 1953 年か 54 年ごろとされている。

5）　2006 年のデータに基づく，ハイファ市の人口統計資料より。

6）　ヨルダン川西岸地区のベツレヘムとその周辺地域にも 2 か所，養豚場と豚肉専門の食肉加工場があるが，そのうち 1 つには訪問すら拒否された。もう 1 か所は東方正教会が運営する施設で，管理者である修道院とかけあった末，短時間のみ見学と聞き取りが許された。

7）　ヘブライ語では「白い肉（basar lavan, בשר לבן）」と呼ばれている。これは，「豚」という直接的な表示を避ける婉曲的な呼称である。

8）　マナイーシュとは，歴史的パレスチナやレバノン，シリアなどで好まれる惣菜パンのことで，通常のパン生地にオリーブオイルで溶いたハーブやパプリカのペーストなどを乗せてオーブンで焼いた，ピッツァ状の食べ物である。植物性の食材で作られることが多く，ことに女性や子どもが好み，前菜としてしばしば食卓にのぼる。

9）　これは，肉を食べる習慣のない筆者に対しての，彼女の個人的な見解である。

10）　2014 年 12 月 16 日，エルサレム・ポスト紙の記事“In poverty report, Arab sector sees improvement, while haredi sector gets poorer”を参照のこと。http://www.jpost.com/Israel-News/Culture/In-poverty-report-Arab-sector-sees-improvement-while-haredi-sector-gets-poorer-384834

11）　イスラエル軍の 2013 年度配置部署別データベースより。www.cogat.idf.il/Sip_Storage/FILES/3/4203.pdf

12）　2.2.1 のファッスータの事例で登場した 50 代の女性は，I の妻である。

13）　2014 年 9 月 14 日，ハアレツ紙の記事“Israel tightens rules of hunting dogs”を参照のこと。http://www.haaretz.com/news/israel/.premium-1.614022

参考文献

太田好信

2009　『民族誌的近代への介入――文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院。

太田好信（編著）

2012　『政治的アイデンティティの人類学――21 世紀の権力受容と民主化にむけて』昭和堂。

菅瀬晶子

2009　『イスラエルのアラブ人キリスト教徒：その社会とアイデンティティ』渓水社。

2010　『イスラームを知る 6　新月の夜も十字架は輝く――中東のキリスト教徒』山川出版社。

2012　「民族紛争の背景に関する地政学的研究 Vol.19　豊穣と共生への祈り――パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬」，大阪大学世界言語研究センター。

2013　「ムジャッダラ考――とある家庭料理をめぐる，シャーム地方文化論」『季刊民族学』143: 57–74。

ダグラス，メアリ

2009　『汚穢と禁忌』塚本利明訳，ちくま学芸文庫。

中村安希

2015　『愛と憎しみの豚』集英社文庫（初出は 2013 年）。

ハリス，マーヴィン

2001　『食と文化の謎』板橋作美訳，岩波現代文庫。

ホール・スチュアート（編著）

2000　『カルチュラル・アイデンティティの諸問題――誰がアイデンティティを必要とする

のか？』大村書店。
Ashkenazi, Eli
2007 *Will Mizra still be able to bring home the bacon?* Haaretz. (Internet, 11th June 2007, http://www.haaretz.com/print-edition/news/will-mizra-still-be-able-to-bring-home-the-bacon-1.222785)
Coon, Carleton, S.
1958 *Caravan: The Story of The Middle East (Revised Edition)*. New York, Chicago and San Francisco: Holt, Rinehart and Winston.
de Vaux, Roland
1972 *The Bible and the Ancient Near East.* Translated by D. McHugh. Darton, Longman and Todd.
Hann, Eugene
1979 *The Abominations of Leviticus Revisited: A Commentary on Anomaly in Symbolic Anthropology*. In Roy F. Ellen and David Reason (eds.) *Classifications in their Social Context*, pp. 103–116. London, New York and San Francisco: Academic Press.
Hesse, Brian
1990 Pig Lovers and Pig Haters: Patterns Of Palestinian Pork Production. *Journal of Ethnobiology* 10(2): 195–225.
Rosenblum, Amalia
2012 *Can a new hunting law protect Israel's endangered animal species?: Critics warn legislation might increase poaching, while alienating Druze and Arabs who consider hunting a cultural legacy*. Haaretz. (Internet, 24th May 2912, http://www.haaretz.com/weekend/magazine/can-a-new-hunting-law-protect-israel-s-endangered-animal-species-1.432375)
Sugase, Akiko
2014 The beginnings of a new coexistence: A case study of the veneration of the Prophet Elijah (Mar Ilyas) among Christians, Muslims and Jews in Haifa after 1948. In Rowe, Dyck and Zimmermann(eds.) *Christians and the Middle East Conflict*, pp. 84–98. London and New York: Routledge.
Yoskowitz, Jeffrey
2008 *On Israel's Only Jewish-Run Pig Farm, It's The Swine That Bring Home the Bacon*. Forward. (Internet, 28th April 2008, http://forward.com/news/13245/on-israel-s-only-jewish-run-pig-farm-it-s-the-01742/)